

論文審査の結果の要旨

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	------------

氏 名
論文 題目 西村 峰龍

当事者が語る

——ハンセン病者と文学者は如何にハンセン病
問題と関わったのか——

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	日比 嘉高
委員	名古屋大学	教授	飯田 祐子
委員	名古屋大学	教授	塩村 耕
委員	追手門学院大学	教授	蘭 由岐子

[本論文の概要]

本論文は、ハンセン病をめぐる文学活動に関し、文学者間の交流と、作品の分析、資料の発掘などを行った論考である。とりわけ、ハンセン病問題に関わったハンセン病者の作家および非ハンセン病者の作家を、ハンセン病問題の「当事者」として位置付け、その多様な状況とアイデンティティについて、実証的に明らかにするものである。序章・終章を別に全8章および補章よりなり、第一部（第一～五章）、第二部（第六～八章）、補章で構成されている。この中には、学術雑誌に掲載された審査付き論文が6篇含まれている。

第一部では、非ハンセン病者でハンセン病問題と関わった小説家・俳人の活動を考察し、国策（救癩政策）に順応的か非順応的かの二元論には収まりきらない様相を明らかにした。第一章では、ハンセン病の作家北條民雄の没後に、川端康成と療養所の医官日戸修一との間で北條の評価をめぐる展開された論争について考察している。さらに、川端康成の小説「寒風」——北條の臨終のようすを描いている——の成立に、この論争が大きな影響を与えてことを明らかにしている。第二章では阿部知二の小説「初秋の海にて」の分析を通して、強制隔離政策への肯定・否定の図式では判断できない阿部の揺れ動くハンセン病観を分析している。第三章では、阿部知二が、ハンセン病療養所の文学活動に、講演や作品選評によって大きな寄与をしていた事実を掘り起こし、評価している。第四章では、「俳句救癩」を掲げて第二次世界大戦以前から戦後にかけて活動した、俳人本田一杉を取り上げることを通じ、高浜虚子門とハンセン病療養所の文学活動との関係を論じている。第五章では、椎名麟三がハンセン病療養所の機関誌において行った作品の選評を分析し、椎名の知られざる文業に光を当てている。

第二部では、「軍人癩」やハンセン病者で被爆者というハンセン病者の多様な当事者性に注意を払いながら、戦後のハンセン病文学作品を中心に考察している。第六章では、戦地でハンセン病を発症した通称「軍人癩」について、ハンセン病者の作家宮島俊夫の「癩夫婦」を通して論じている。第七章では、阿部知二の「黒い影」を考察し「軍人癩」の夫を持ったことを隠し戦争未亡人として生きざるをえなかった女性の姿を分析している。第八章ではハンセン病者で被爆者の作家風見治の小説「コロナ」を取り上げ、ハンセン病者と被爆者という、異なる当事者性をもつ者同士の連帯の可能性を論じている。補章ではハンセン病者が被疑者となった殺人事件（菊池事件）を取り上げ、その救援活動のようすを考察している。

[本論文の評価]

本論文が対象としたハンセン病患者をめぐる文学については、日本近代文学研究において、これまでも少なからぬ成果がある。本研究は、従来、ハンセン病の患者自身による文学のみに注目が集まってきたのに対し、ハンセン病患者や療養施設に関わった非ハンセン病の文学者達の活動にまで視野を広げたものである。

本論文の達成として評価できる点は、次の三点に集約できる。

一つには、各地のハンセン病療養所まで実際に足を運び、保存されている資料から、同人誌や会誌類などを多数掘り起こしていること、療養所の人びとからも聞き取り調査を行い、問題関心を深め、それを論文の記述に生かしていることがあげられよう。地道な実証の努力により、これまで取り上げられてこなかった多数の資料が検討されることになり、ハンセン病患者たちの活発な文学活動の再評価が可能になっただけでなく、高浜虚子や阿部知二、椎名麟三など、著名な文学者たちの知られざるハンセン病患者との交流も明らかにされた。

二つには、非ハンセン病の作家を含めて、ハンセン病文学を考えようとしていることである。『ハンセン病文学全集』が刊行されるなど、この領域については一定の蓄積がある。しかし本論文は、「当事者」という概念の捉え直しを梃子に、「ハンセン病文学」というサブ・ジャンルの再検討の可能性を示すことに成功している。

三つには、当事者性、また病者のアイデンティティの複数性を考えようとした点である。とりわけ、後半の第二部では、ハンセン病患者をハンセン病という視点だけから見ることに疑義を呈し、「軍人」「被爆者」という別のアイデンティティを導入し、その複雑さを記述しようとして試みている。

以上のほかにも、これまで「糾弾の歴史」として語られがちだったハンセン病の歴史を再検討し、隔離施設の外側に開かれた様態を明らかにしたという点についても、審査委員から評価の声が上がった。

ただし、実証作業と論理的な深化のバランスについては、改善の余地もあるだろう。多くの資料に当たり、従来は光の当てられなかった事実が数多く示された点に関して評価できる一方、その事実をもとにしたさらなる考察の深まり——たとえば作品の読解の転換や、大きな視野での文学者たちの活動の評価など——については、なお今後の展開が期待される。

とはいえ、本研究の価値そのものを損なうものではなく、執筆者が今後この課題を乗り越えていくだろうことは、第二部に収められた「当事者性」の複数化を視野に入れた諸論考の方向性が、示しているとおりであろう。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。